

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木 優子

44

「あのね、あんまり人に知られてはいないんだけど、夜景が綺麗に見えるところがあるんだ。そこでもいいかな?」

和樹がハンドルを握ったまま尋ねる。

「もちろん! わあ、楽しみ!」

カーステレオから美しいピアノのメロディが流れ始めた。

「ん? これ、誰の曲?」

「これ? クリス・ハートの「糸」っていう曲だよ。」

「はじめて聴いたわ。すごく素敵な曲ね。」

「そう、最近の僕のお気に入りなんだ。ねえ、優子は普段はどんな音楽を聴くの?」

「え? 私? そうねえ。ジャズとかボサノバとかかなあ? 子育てするようになってからはあんまりゆつくり音楽を聴くこともないかなあ。」

和樹の運転は実に穏やかで、赤信号の時にはそつと止まり、カーブの時にも、助手席の優子を大いに気づかしてくれているのがよくわかった。また、スピードをあげるべき時には、十分に加速し、いつも運転の下手な夫の車に乗り慣れている優子は、和樹の運転の上手さに感心した。

車はいつの間にか市街地を抜け、小高い丘へと続く木立の坂道を上っていく。

「♪縦の糸はあなた、横の糸は私…」カーステレオからはクリス・ハートのロマンティックな歌声が流れてくる。いつしか二人はおしゃべりを止めて、この曲に耳を澄ませた。

優子がそつと和樹の横顔をのぞき見ると、和樹が瞳を潤ませながら、ハンドルをぎつと握りしめている。

優子が慌てて「どうしたの?」と尋ねると

「ぼ、僕はね、こうして優子を助手席に乗せてドライブしてるのが夢みたいだっと思えてね…」

ああ、和樹さん、私も気持ちは同じよ…。

(続く)